

《研究ノート》

古代ギリシア史研究における
プロソポグラフィーの効用とその意義

酒 嶋 恭 平

はじめに

プロソポグラフィーという研究手法は、歴史学で扱うあらゆる時代・地域・分野で用いられる、ごく一般的な手段の一つであるだろう。これは、西洋古代史の分野でも、最も注目される研究手法の一つである¹⁾。とりわけ、ローマ史研究は、近代イギリス史研究と並び、プロソポグラフィーという研究手法が発展・拡大した中心点であった。ローマ史においては、文献史料のみならず、この手法を十二分に活用できる碑文などの非文献史料が膨大に残されており、本格的な学術的研究が発する 19 世紀の時点で、実りある成果が産出される土壌が整っていたのである。こうした事情は、1990 年に出版された高橋秀の優れた整理によって我が国でも周知のことであろう（高橋 1990）。ローマ史研究ほどのインパクトを残すことはなかったが、この手法は、古代ギリシア史研究においても重宝されてきた。ローマ史と同様に、19 世紀末より研究は進展しつつあったが、とりわけ第二次世界大戦以降、発掘調査の進展に伴う史料の増加により、多くの優れた成果が産出されている。例えば、1971 年に出版されたジョン・K・デイヴィスによる『アテナイの富裕家族』は、当時新たに発見された碑文史料をふんだんに用いて、ローマ帝政期以前のアテナイで確認される富裕なエリート層の経歴や家族構成を明らかにしている。20 世紀の古代ギリシア史研究における、プロソポグラフィー的手法の代表的成果の一つであろう。21 世紀に入った現在においても、研究視野の拡大も相まって、新たな研究成果が現れている。

本稿の目標は、古代ギリシア史研究におけるプロソポグラフィーという研究手法の成果を概観し、その成果と課題を考察することにある。包括的な研究紹介と批判を行うものではなく、あくまでこれまでの研究蓄積に依りながら、従来の研究を概括することを目指す。以下の行論では、まずプロソポグラフィーの概要を述べ、次いで、古代ギリシア史におけるその動向を整理し、その後、この手法の問題点を指摘したい。時代・地理範囲については、筆者が専門とする古典期からヘレニズム期に限定することとし、東地中海沿岸部を範囲とする。

既に言及した通り、古代ローマ史については高橋の優れた整理がある。本稿は氏の整理から多くを得ており、そちらも併せてご覧いただきたい。

第1章：プロソポグラフィーという研究手法の概略

「プロソポグラフィー」とは、古代ギリシア語で「顔」を意味する「プロソポン」から派生した造語である。我が国の西洋史学界ではすっかりカタカナ表記が定着しているが、「集団的伝記研究」などの訳語が使用される場合がある。この研究手法は、一般に特定のグループに属する人物の出身地、人種、職業、家族、宗教などの伝記的情報を収集し、場合によっては他のグループと比較することで、そのグループの特徴を把握することにある。

既に高橋が紹介しているが、ローレンス・ストーンが1970年に公にした論考によれば、プロソポグラフィーの利用には、「選良派 (elite prosopography)」と「大衆派 (mass prosopography)」という二つの潮流があるという。前者は主として政治史の領域を扱い、小規模な集団内部の血縁関係や婚姻関係に注目するのに対し、後者は社会の動向や人々の移動に焦点を当て、社会構造の変化や、社会的流動性の規模や性質を記述するものであるという (高橋 1990: 127-128)。もっとも、史料の量・質的な問題から、この区分は必ずしも厳格に設けられているわけではなく (Verboven, Carlier and Dumolyn 2007: 42)、また、近年、社会科学の方法論の採用が増加したことや、コンピューターの普及に伴い大規模なデータの統計処理が可能になったことで、この区分の有効性は失われつつあると指摘する者もいる (Keats-Rohan 2007: 10-11)。前者は「質的」、後者は「量的」アプローチだと言われることもある。もっとも、理想的に言えば、プロソポグラフィーの目標は統計処理を施した情報と、個人の伝記的情報の組み合わせた分析にあるとされ、完全に両者を結合させた研究は極めて実現困難でありながらも、あまりに厳密な区別は設けるべきではないだろう。近年では、従来の血縁関係や職務に注目した「伝統的な」プロソポグラフィーに対し、個々人が形成するネットワークにより注目する「新たな」プロソポグラフィーも存在するという (Keats-Rohan 2007: 12-13)。

他方で、しばしば指摘される通り、プロソポグラフィーという研究手法に関して、研究者の間で統一された用法があるわけではないことも確かである²⁾。時代ごとに史料の質や量には大きな隔たりがあり、プロソポグラフィーを利用する際の方法や目的も、必然的に変化していくのである (大野 2013)。例えば、統計的に処理することを「狭義」のプロソポグラフィーとして定義して利用するものもある (大野 2013: 34-36, 39 n.2)。古代史に関して言えば、上記の手法に加え、ある個人の人的結合の解明を通して、彼／彼女が用いた政治手法や政治的基盤を明らかにする上で、プロソポグラフィーが用いられてきた。どちらかということと人名学 Onomastics の範疇に含まれるかもしれないが、人名を収集し、異なる史料に表れる個人を同定することも、プロソポグラフィーの範疇に含まれる (Fossey 1991: 1-5; Salomies 2001: 77)。顕著な事例が『ギリシア語人名辞典』(LGPN) であろう。この辞典は、「人名辞典」と銘を打ちつつも、史料上に現れる人名を可能な限り収集・同定し、同定された個人に關係する史料をほぼ網羅的に提示している。Bryn Mawr Classical Review 誌上の書評で、本

書は「内容はプロソポグラフィー」と評価されているように (Rigsby 1995)、伝記的記述とまではいかずとも、読者は容易に個人がいかなる人物であったか復元できる。古代ギリシア史においてプロソポグラフィーと言う場合には、この用法で用いられている場合が多いように思われる。また、グループなどではなく、一個人の経歴を復元する作業も、プロソポグラフィーと称されることがある。どのような用法にせよ、いずれの時代・地域・社会においても、この研究手法が政治史・社会史・文化史において極めて重要な意義を持つことは論を俟たない。

最初に「プロソポグラフィー」の名を冠したとされる書物は、現在確認されているもので、1537年に出版されたユスティン・ゲプラーのものが最初であるとされている。彼の用法に基づけば、この言葉は当初、「著名な人物の伝記」という意味を持っていたらしい (Göbler 1537)。19世紀に入ると、プラトンの書物に登場する人物に対するプラトン自身の言及を蒐集したオランダ人歴史家フルン・ファン・プリンステレルの成果が表れた (Groen van Prinsterer 1823)。ここでは「プロソポグラフィー」の語は、索引的な意味合いで用いられていた。現在の意味を最初に構想、実行したのは、19世紀末ドイツの古典学者であるオットー・ゼークであるという (ビーチ 2009: 77)。19世紀末には、『ローマ帝国プロソポグラフィア (*Prosopographia Imperii Romani*)』(PIR) と『古典古代学百科事典 (*Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*)』が相次いで出版された。これらは、プロソポグラフィー的研究の先駆として、今日でも評価されている。とりわけ前者はテオドル・モムゼンの尽力によって結実したものであり、まさしく近代的なプロソポグラフィーの誕生を告げる作品となった。またベルリン・アカデミーは、アテナイ市民個々人の史料を網羅した、ヨハンネス・キルヒナーの手による『アッティカ・プロソポグラフィア』(PA)、ローマ帝国の有力人物の史料を網羅した、エドムント・グロアクらによる『ローマ帝国プロソポグラフィア』の第2版を出版した³⁾。これらは伝記の作製ではなく、個々人に関する史料の網羅的蒐集を目的としたものであった。この意味でのプロソポグラフィーが人口に膾炙するようになったのは、この頃である⁴⁾。こうした研究を基にマティアス・ゲルツァーやロナルド・サイムらの研究が登場することとなる。

その後のプロソポグラフィー的研究手法の発展と、それを用いた歴史研究については、ストーンと彼に基づく高橋の整理が既にあるので、そちらを参照されたい⁵⁾。以下では、古代ギリシア史におけるプロソポグラフィーの進展に注目する。

第2章：古代ギリシア史のプロソポグラフィー研究

1. 古代ギリシア史におけるプロソポグラフィー的研究の発展

古代ギリシア史研究におけるプロソポグラフィー研究の嚆矢は既に述べたキルヒナーが編纂した『アッティカ・プロソポグラフィア』である。PIRを範とした本書は、史料に現れ

る大体前6世紀から紀元5世紀までのアテナイ市民個人の情報に網羅的に蒐集、整理したものである。その後、ヨーロッパではキルヒナーを模範とする成果が続いた。例えば、アッティカについてはヨハネス・スンドヴァル (Sundwall 1910)、スパルタに関してはポール・ボラッラ⁶⁾。ビュザンティオンとカルケドンについてはハインリヒ・メルレの業績を挙げることができる (Merle 1916)。後に述べるヘルムート・ベルヴェによるアレクサンドロス3世に関係した人物の研究も、古代ギリシア史における初期のプロソポグラフィ的研究の代表事例と言える。他方で、フリードリッヒ・ショバーはフォキス地方を扱った。これは、ボリスではなく、地域全体扱うという点で、従来の研究に新風を吹き込ませるものであったという⁷⁾。この形式での研究は、フランスを中心に進展した。例えば、ロクリス地方を研究したリュシアン・レラ (Lerat 1952)、アテナイのラムヌス地方を研究したジャン・プイヨール (Pouilloux 1954)、タソス島を扱ったクリスティアン・デュナンとプイヨール (Dunant et Pouilloux 1958)、ボイオティア地方のヒュエツトスを扱ったローラン・エティエンヌとデニス・ノフラーなどによるものが挙げられる⁸⁾。

他方、アメリカでは、1920年代から1930年代までオリュントスの発掘にも携わったデイヴィッド・M・ロビンソンと彼の弟子たちが、考古学的研究に付随する形で研究を行った。嚆矢となったのはロビンソン自身による、シノペで発掘された碑文を基にした研究であった (Robinson 1906: 269-279)。これは、シノペ史研究の成果の一部として出版されたものである。その後、彼のもとでジョン・ホプキンス大学にて学んだ学生たちが、同様の研究を行った。例えば、クリスティアン・スカレットはシキュオン (Skalet 1928)、ジュール・エルビヨンはペロポネソス半島北部のパトラ (Herbillon 1929)、マベル・グードはオリュントスに関する研究を行った (Gude 1933)。彼らを指して「ロビンソン学派」と呼ぶ向きもある (Fossey 1991: 12)。彼らはキルヒナーを踏襲しているが、その実、史料状況から、人名学的な様相を呈している。

1920年代頃より、ギリシア人の手による研究も発展した。彼らの手法も主としてキルヒナーの伝統の上にあるが、ギリシア本土のみならず、マケドニア地方やその周辺部をも研究対象としているのが特徴的である。テッサリア地方のトリポリスとペツライボイ、デメトリアス・パガサイに関するアポストロス・Σ・アルヴァニトプロスの研究を先駆とし (Αρβανιτόπουλος 1925/6; Αρβανιτόπουλος 1928: 165-179)、アンフィポリスを扱ったヨハネス・パパスタヴル (Papastavrou 1936)、アルゴス地方に関するマルケッロス・Θ・ミツ (Μιτσού 1952)、ローマ期のマケドニア人に関するディミトリオス・カナツリ (Κανατσούλη 1955) などが挙げられる。このような伝統は、ギリシア国立研究財団 (National Hellenic Research Foundation) に引き継がれ、現在に至るまで多数の研究成果が公にされている⁹⁾。

非市民や、特定の公職などといった、より細かなテーマやトピックを取り扱う研究も、20世紀初頭より進んだ。例えば、アテナイの外国人¹⁰⁾、デロスの外国人 (Roussel 1908; Lacroix 1914; Roussel 1915/6)、イタリア人商人 (Hatzfeld 1919, cf. Hatzfeld 1912)、アテナイの将軍

(Sarikakis 1976)、ヘレニズム諸王の使節 (Olshausen 1974)、イシス崇拝に関連した人物 (Dunant 1973)、奴隷解放の記録を記した碑文における解放奴隷 (Reilly 1978)、ディオニュソスのテクニタイ (Στεφανής 1988) などに関する研究が挙げられる。こうした事例は枚挙に遑がない。こうした成果の内、研究対象がアテナイであることのみならず、徹底した史料の収集と分析から、最も影響力を持ったのは、おそらくディヴィスによる『アテナイの富裕階級』(APF) であろう。これに関しては後に詳しく触れたい。

ヘレニズム諸王国に関するプロソボグラフィー的研究も、20 世紀初頭より行われている。その嚆矢は、アレクサンドロス大王に関連した人物を蒐集したヘルムート・ベルヴェの成果である (Breve 1926)。彼の成果は、後にアレクサンダー・ヘッケルによって補足・改訂されたが (Heckel 2006)、今でもヘレニズム史研究の基礎文献の一つである。また、各ヘレニズム王朝に関連する人物についてのプロソボグラフィー的研究も進んだ。ヘレニズム期のプロソボグラフィー的研究における最大の成果はプトレマイオス朝に関わる人々を網羅する『プトレマイオス朝のプロソボグラフィア』であろう。これはルーヴェン大学を中心に、ウィリー・ペレマンとエドムント・ファント・ダックによって始められたプロジェクトで、既に 10 巻に及ぶ成果が出版されている¹¹⁾。現在では、インターネット公開もされている¹²⁾。セレウコス朝ではジョン・D・グレインジャーによる 800 頁を超える網羅的な成果がある (Grainger 1997)。他に、王朝と密接に関係した人々や集団に関しても、調査が及んでいる。例えば、フィロイと呼ばれた王の側近に関しては、1970 年代頃より、プトレマイオス朝ではレオン・モーレン (Mooren 1975; Mooren 1977)、アンティゴノス朝ではシルヴィ・ル・ボエヤリチャード・R・ビロウズ (Le Bohec 1985; Billows 1990)、小アジアの王朝に関してはイヴァナ・サヴァッリ＝レストラーデ (Savalli-Lestrade 1998) といった研究者が相次いで成果を示し、フィロイに関する理解を大きく深めた¹³⁾。

プトレマイオス朝エジプトに関しては、莫大な量のパピルス史料とそのデータベース化により、プロソボグラフィー的研究が進展している。幾つかあるデータベースの中でも、『Trisesgistos』は、人名のデータベースを有しており、2018 年 4 月現在では未完成ながら、極めて有益な情報を得ることができるであろう¹⁴⁾。これらの情報を基に、サンドラ・クセマンは、ギリシア語とエジプト語両方の名前を持つ人物を蒐集した (Coussement 2016: 215-376)。

このように、個別研究は著しい進展を見せたが、プロソボグラフィーという手法自体に関してはまだ蓄積が不十分である。こうした中で、ジョン・M・フォッシーによる『古代ギリシアのプロソボグラフィー的研究』は、80 年にも及ぶ研究史の中で初めてかつほぼ唯一出版された古代ギリシア史研究におけるプロソボグラフィーの手引書である (Fossey 1991)。これは、研究史の流れのみならず、従来断片的にしか触れられてこなかったこの手法を用いる際の注意点を集約的に記した初の試みであり、学界の評価は高い (McLean 2002: 105)。さらに 2007 年には、オックスフォード大学のプロソボグラフィー・センターから、プロソボ

グラフィーに関する包括的なハンドブックが出版された(Keats-Rohan (ed.) 2007)。2005 年に開かれたカンファレンスを基にした本書は、プロソポグラフィーの定義や方法論を論じると同時に、時代毎に新たなプロソポグラフィー適用の可能性を提示するものである。もちろん古代史は、ローマ史を中心にいくつかの論文が収録され、本書の中でも大きなプレゼンスを占めている。

このようにプロソポグラフィー的研究は、20 世紀の幕開けと共に着実に積み上げられていった。以上のような研究進展の背景には、19 世紀末から断続的に実施されてきた考古学調査の結果、膨大な量の碑文史料が新たに発見されたこと、また、1960 年代以降にはパソコンが普及し始めたことが原因として挙げられる。さらに、単なる人名事典ではなく、史料まで調査、言及した『ギリシア語人名辞典』の編纂も大きな意義を持つ¹⁵⁾。近年ではデータベースのインターネット公開も進んでおり、さらなる研究の発展が期待される。

2. ギリシア史におけるプロソポグラフィー的研究手法の意義

プロソポグラフィーという研究手法は、個人の情報を集積するというシンプルな方法が研究の基礎となっているために、必要な史料さえ残存していれば、あらゆる時代・地域に適応可能な普遍的な手法である。しかし、この手法がそれぞれの研究分野にもたらす成果は、史料状況や史料の特性に左右され、一様ではない。例えば、近現代史のように、大量の史料から個々人の情報を収集し、そこから特定の集団の特質を解明する、といった研究の仕方は、史料に一度しか登場せず、身分や経歴といった情報を全く読み取ることでできない個人が大多数を占める古代ギリシア史研究には、適応が困難な場合が多いだろう。とはいえ、個人の情報を正確に集積すること自体が貴重な研究成果であり、様々な方面で再利用することができるはずである。また、その段階において、各時代・地域の史料状況を反映したプロソポグラフィーの利用方法を確認することができると考えられる。では、古代ギリシア史研究において、プロソポグラフィーは具体的にどのように用いられ、それによって研究の進展にどのように寄与しているのだろうか。上で言及したフォッシーを参考にしつつ、古代ギリシア史研究に特徴的なプロソポグラフィーの意義を確認したい(Fossey 1991: 1-10)。

①プロソポグラフィー的研究手法を通して、ある家族の歴史や社会関係を復元することができる。古代ギリシア人は、古典期からヘレニズム期にかけては、祖父の名前を継承する慣習を持ったことで知られるが、それを手がかりに、異なる時期に史料中に見られる同姓同名の人物を特定したり、また、父名を頼りに、異なる家族同士の婚姻関係を明らかにしたりできるのである。こうして家系図を復元することで、特定の家族がどの家族と婚姻関係を結んでいるか、また、その家族の隆盛や衰退という変化も解明することも可能である。こうしたデータの集積によって、古代ギリシアにおける特定の社会層がどのような人々で構成されたか、具体的に解明するヒントを得られよう。また、特定の職務を持つ人物との関係が明らか

になれば、その人物が職務を果たした年代によって、碑文の年代を特定し得る。

②プロソポグラフィを通じて、碑文に表れる人名から、その碑文の年代を特定することができるようになる。発掘調査の結果により出土した碑文は、古代史研究において極めて重要な情報を提供してくれる史料である。しかし、損傷や経年劣化によって建立当初の状態を維持している碑文はほとんどない。また、碑文として刻まれた文言自体が極めて簡略化されているために、情報を読み取ることが困難である場合もしばしばある。加えて、古代に残された碑文は多くの場合、独自の紀年法を持ち、それらには概ねその共同体の主たる官職とそれに就任した人物の名前が用いられる（例えばアテナイでは筆頭アルコンが用いられ、「オリュンピオドロスがアルコンの年」などという形で表記される）が、こうした文言が失われた場合、また、そもそも刻まれていなかった場合には、碑文の年代特定は極めて難しい。その場合に、碑文の年代特定を可能とする情報の一つが、人名なのである。

例えば、ある碑文に哲学者ソクラテスの名前が刻まれていた場合には、碑文の字体や、碑文に刻まれた内容にも左右されるが（例えば墓碑の場合、ソクラテス死後に碑文が作成されたと考えるべきである）、その碑文が、彼が公的な活動に参加できたと思われる前5世紀末から前399年頃に作成された可能性が高い。あるいは、欠損箇所にソクラテスの名前が刻まれていたと判断できれば、碑文の年代を同様に特定できる可能性が高まる。一般に古代ギリシア人は、碑文に人名を刻む際、彼／彼女の名前と共に、国籍（あるいは所属する区）と父名を刻むことで、その個人を同定する。例えば、ソクラテスが何らかの形で碑文に刻まれる場合には、「アテナイ人ソフロニスコスの子ソクラテス」あるいは、「アロペケ区ソフロニスコスの子ソクラテス」となる。アテナイで碑文が建立される場合、外国（人）が建立主体とならない限り、後者が用いられる。これは古代ギリシア語に直すと「Σωκράτης Σωφρονίσκου Αλοπεκεθεν」となる。この29文字ないしはその変化した形が当該碑文の欠損部位に適切に当てはまれば、その碑文にソクラテスが表れていることがわかる。

こうして碑文の年代特定ができれば、それをコンテキストに置き直して解釈することもできるようになるため、その史料価値は高まる。反対に、年代が特定されることで碑文が成立した時期の社会的、経済的状況や、政治情勢を解明することに寄与できるかもしれない。史料の乏しい古代史研究において、一つ一つの史料の信頼性や利用可能性を高める作業が極めて重要であることは、論を俟たない。

③碑文史料や考古学資料は、文学的史料を基に構成された歴史像にて欠落したもの、認識の難しいものを補完することができるが、プロソポグラフィはこうした補完作業に密接にかかわっている。例えば、婚姻、子供の命名の慣習、土地所有の仕方、奴隷の社会的移動や女性の社会的地位については、文学的史料からはほとんど明らかにできず、碑文史料に基づく知見に頼らなければならない。その際、この研究手法は極めて役に立つ。その事例とし

て、フォッシーが挙げるところでは、いかなる劇作家がアテナイで活動したか、解明した研究がある。それによれば、競技会に関連する碑文史料を基にいかなる劇作家が存在したか調査してみると、特にヘレニズム期においては、アテナイ人以上に、ボイオティア人の喜劇作家が多かった可能性があるという。アテナイは文化的中心地である一方でボイオティアは文化的後背地とされてきたが、このような理解に再考の余地を投げかけうる結果であると言える。他にも、特定の集団の構成やエスニシティについても、この研究手法は極めて有効な手段である¹⁶⁾。

以上のような意義を踏まえつつ、フォッシーは古代ギリシア史におけるプロソポグラフィーが、他の時代・地域のみならず、ローマ史研究でのそれと異なることを認める。古代ギリシア史においては、アテナイやエジプトといった例外を除けば、史料の少なさやその性質の難点のため、エリート層や政治経済的分野に関係する統計的研究で僅かに使用可能である程度なのだという (Fossey 1991: 45)。「プロソポグラフィー」の名を関した論文や研究書がしばしば特定のトピックに関連する人物のリストになりがちで、ほとんど人名学のような状況を呈するのは、こうした状況に起因する。次の章では、こうした状況の中でもリスト作成以上に積極的に歴史研究に使用された事例をみていきたい。

3. 歴史研究とプロソポグラフィー

ここまで、プロソポグラフィーに関する問題点を『オックスフォード古典学事典』の「プロソポグラフィー」の項を紐解くと、ロナルド・サイムが用いたようなプロソポグラフィーを用いた議論を、歴史研究に本格的に古代ギリシア史に適用させたのは、エルンスト・バイディアンによって書かれた「ハルパロス」という論文が最初であるとされる (OCD⁴ s.v. *prosopography*)。つまり、歴史上の出来事を解釈するためにプロソポグラフィーの成果を用いたのは、ギリシア史においてはやや後発的だと考えられているのである。古代ギリシア史においては、ローマ史におけるサイムの研究のような、強力な影響力を持った歴史研究は存在しないのもまた事実である。しかし、こうした研究は確実に産出され、古代世界の実態に新たな解釈をもたらしてきた。以下では、筆者の専門である古典期・ヘレニズム期のギリシア史に関して、先鋭的な問題意識を持ってプロソポグラフィー的手法を利用した議論を紹介しよう。

①デイヴィスによる *APF* については既に言及したが、これは、個人の富が古典期アテナイ社会に与える影響力がどの程度のものであったか、その範囲を探るべく企図されたものであった¹⁷⁾。その際に、デイヴィスは、財力は継承されるものと考え、個人ではなく、家族を単位として考察を進めるべきことを主張した上で、富裕層の基準として、国家のために公共奉仕を行った人物（加えて公共奉仕階級として史料上で言及される *οἱ πλούσιοι*, *οἱ*

εὔποροι) を軸として総数 779 名の個人を抽出し、その家族を調査したのである。APF は元々オックスフォード大学に提出した博士論文を分割・改訂したものであったが、プロソポグラフィーの成果を基に分析を行った箇所は、後に『古典期アテナイの富と富の力』という題で出版された。ここで彼は、アテナイの上層階級を構成する人口の社会的流動性が大きかった可能性を指摘した (Davies 1981: 73-87)。前 5 世紀から前 4 世紀にかけて、財力を基盤とし、かつての政治家が有した伝統的威信や貴族の背景を持たない政治家層が台頭してくることは以前から知られていた。しかしデイヴィスは、網羅的な調査を通じて、この見解を確認するだけでなく、古典期全体の富裕層の社会的流動性を示したことで、貴重な成果をもたらした¹⁸⁾。

②ベイディアンは 1961 年に発表した論考において、ハルパロス事件を考察した (Badian 1961)。ハルパロス事件とは、前 324 年、アレクサンドロスの側近であるヘタイロイの一人ハルパロスが、アレクサンドロスの許から逃亡し、アテナイにやって来たことで勃発した一大政治スキャンダルである。ハルパロスがもたらした多額の金銭を巡って裁判が起き、当時最大の政治家であったデモステネスが処罰されたことで知られる。ベイディアンによれば、事件の中心地がアテナイであったことで、この事件はとりわけアテナイの問題として研究史上で扱われてきた。そのため、ハルパロスが属したアレクサンドロスの宮廷という背景については、十分な考察が行われてこなかったという。このような問題を克服すべく、ベイディアンは、アレクサンドロスの宮廷に属した人々の情報を調査した。彼によれば、ハルパロス逃亡のきっかけとなったインド遠征以降のアレクサンドロスによる粛清とは、従来語られてきたように不正を行った人々を罰したというより、強大な権力を持った部下を処刑することで、遠征失敗により揺らいだ軍隊内での自身の権威を再度確立すべく行われた。そして、ハルパロスが逃亡を決意したきっかけとして、アレクサンドロスの部下の一人であるクレアンドロスとその一派（そして、おそらく、クレアンドロスの兄弟コイノス）の粛清を挙げる。彼らはハルパロスと同郷であると同時に、同じ部隊としてエクバタナに駐留したことから、密接な関係を持っていたと思われ、それがハルパロスに逃亡を決意させたと考えられるという。このようにベイディアンは、プロソポグラフィーを利用してアレクサンドロスの粛清という出来事に新たな解釈を与えるとともに、ハルパロスの逃亡をその解釈の中に位置づけている。

③最後に、古典期アテナイでいかなる人々が政治に参加したのか検討したクレア・テイラーの議論を紹介したい (Taylor 2007)。彼女は、アテナイにおいてどのような市民が、どの地域から政治に参加したのか、実態と変遷を調査すべく、プロソポグラフィーのデータを統計処理した。既に紹介した通り、アテナイの市民は自身の名前を父の名前と父が所属した区名で同定するために、その市民がアッティカ地方のどの区の出身であるか、把握すること

ができる。また、彼女は、その市民が富裕層か否かも同時に考察した。考察の結果、アテナイは前4世紀になると中心市の外を出身地とする市民が多く政治に参加するようになると同時に、政治に参加する非富裕層の割合が増加するという。つまりアテナイは前5世紀から前4世紀になるにつれて、より民主的な社会になるといっても過言ではないと言うのである。彼女の議論はいくつかの点で批判されるべきなのは言うまでもない。例えば、前5世紀と前4世紀を比較する上で史料の違いをより考慮に入れる必要があるのではないだろうか。しかし、彼女の議論は、プロソポグラフィーを利用する一つのモデルを提供しているように筆者には思われる。本稿の最後にも述べるが、こうした統計処理の利用は重要な切り口となると考えられる。

このように、プロソポグラフィーは、古代ギリシアの政治や社会を解明する上で、重要な知見を提供してきた。無論、ここでは紹介し切れなかった研究も豊富にある。他の時代と比べると限定的ではあるものの、実りある成果をもたらしてきたのである。

第3章 古代ギリシア史研究におけるプロソポグラフィー的研究手法の問題

上では、古代ギリシア史におけるプロソポグラフィー的研究手法の歴史研究への利用を紹介してきた。こうした手法は豊富な成果を提供してきた。しかし、当然この手法自体に問題がないわけではない。以下では、その問題点を確認したい。この作業を通じて古代ギリシア史研究におけるプロソポグラフィーを利用する際の特質も確認できると思われる。なお、本稿では便宜上以下に示すように問題点を6つに区別した。これらは、それぞれが密接に関連しており、必ずしも明確に区分することができないものである。

1. 基準の問題

プロソポグラフィー的研究とは特定の集団の性質を明らかにするために利用される。しかし古典期・ヘレニズム期に関しては、階層秩序や官職が制度として形成されていたローマと比較した場合に、基準の設定が困難な場合が多いように思われる。例を挙げると、古典期・ヘレニズム期アテナイの富裕者をプロソポグラフィー的に研究したデイヴィスの議論では、アテナイの「富裕階級」に関して入念な概念設定を行っているが、ここで問題となるのは、この「富裕階級」という概念が適切か否か、ということであろう。例えば、デイヴィスは基準の一つとして、三段櫓船奉仕義務を遂行可能か否かという基準を用いている。しかし、アテナイには、三段櫓船奉仕義務を遂行可能なほどに富裕とは言えないが、それでも、政治活動を行う上で十分に富裕な人々は存在した。例えば、グラハム・オリヴァーとデイヴィスが後に認めたように、騎兵を務めた人々も富裕者とみなしてよい (Oliver and Davies 1996)。また、富裕者に近い富を有する人々も存在したはずである (竹内 2007: 82)。こうした人々を含めない場合、デイヴィスのプロソポグラフィーに基づく歴史像の構築に、問題が生ずる可

能性はあるだろう。

またヘレニズム期に各王朝の諸王に仕えた「フィロイ」の場合も同様である。「フィロイ」とは字義通りに読めば「友人」という意味を持つ言葉であり、ここから想定される通り、フィロイは王たちと私的な紐帯を有していたとされる。既に述べたように、多くの研究者がこのフィロイという人々に関するプロソボグラフィー的研究を行っているが、実はフィロイを明確に判断する基準は極めて曖昧である。例えばピロウズは、アンティゴノス1世モノフタルモスに仕えた人々のうち、史料中から確認される人々ほぼ全てがフィロイだったと主張する（Billows 1990: 246-250）。確かに、史料に確認できる人々は概ねアンティゴノスから何らかの職務を受けており、官僚制が未発達であった彼の王朝の許では、アンティゴノスと彼らの許に私的紐帯があったために、そうした職務に任命されたと想定すべきかもしれない。しかし、彼らの大半は史料中でフィロイとして言及されていない。彼らはあくまでも研究者が設定したフィロイ概念に当てはまるために、研究者によってフィロイと認定されているに過ぎないのである。

古代ギリシア史においては、史料的制約から、法制度的に存在が担保される集団をプロソボグラフィー的研究の対象とするのが困難である。そのため、特定の分析概念を設定する必要があるが、その場合に、その正当性はどのように担保されるべきか、精緻な議論が必要である。これはプロソボグラフィー的研究手法において一般に共有される問題でもある。あまりに定義がルーズであると、そこに含まれる集団に共通する特徴もまた曖昧なものになるを得ず、結果として有意義な考察ができなくなるのである。

また、こうした概念設定において注意が必要なのは、設定された集団の基準を満たしても、そこに含まれた人々は実際に何ら関係を持たない可能性があるということである。上で挙げたフィロイを例にとれば、彼らは主君たるアンティゴノスとの人的紐帯を有してはいるが、フィロイ間にはどの程度紐帯があったか、ほとんどわからない。彼らの存在は法的に担保されておらず、またそうした集団が、実体を持つ集団として実際に形成されたわけではない。ただ、アンティゴノスとの紐帯という、極めて曖昧な関係のみが彼らをフィロイたらしめているのである。果たしてフィロイと認定される人々は、集団として括ることができるのだろうか。

イギリス史研究者である大野誠は、石田純郎による江戸時代の「来日オランダ医」の研究を紹介する中で、この問題に触れている。というのも、石田の研究は、「特定の年に出島に滞在したオランダ医は1人」だったことから、「来日オランダ医」なる集団は実際には形成されていなかったことを示したからである。これに関して大野は「プロソボグラフィの「集団」とは、歴史の実態としての集団のみならず、歴史研究者が「集団」と認定するものまでを含んでいることになる。この方向をさらに進めると、「集団」はある歴史上の人物を取り巻く複数の人物という程度の意味しか持たなくなる。仮にそうであるとしても、「共通の基盤」が浮かび上がっていればそれでよいのである」と述べている（大野 2013: 36）。確かに

「共通の基盤」の解明は極めて重要だが、こうした手法は、誤解を招く可能性があるということを、十分認識しなければならない。

これに関連して、ローマ史研究者であるエックの指摘に触れておきたい。彼によれば、プロソポグラフィー的研究手法とはあくまで個々人の情報の集積でしかなく、例えば特定の役職に就任した人々について情報を集めてみた場合、その役職に就いた人々の特徴を把握することができても、そこからその役職自体の制度上の機能や権能を理解することは難しい(Eck 2009)。たとえ特定の集団の存在が法制度的に担保されたとしても、それはあくまでも集団に含まれる人々の特徴なのであって、そこから集団が務めた役職がどのように法制度的に規定されていたかに関して議論するのは困難なのである¹⁹⁾。

2. 代表性の問題

獲得した情報はどの程度その集団を代表するものか。特に残存する史料の量が常に問題となり続ける古代史においては、この問題を回避することは不可能と言わざるを得ない。しかしこの問題は、史料の残存状況だけに起因しない。例えば、デイヴィスの富裕階級に関する研究では、富裕者としてみなすことのできる人々は同定・蒐集可能だが、彼らの母数は決して確定できない。デイヴィスが用いた基準の一つである公共奉仕義務一つをとってみても、この奉仕は毎年可能であると同時に、この奉仕を務めるか否かは財産額によって決定されるため、代表性を担保するための母数を設定する基準を設定することが困難なのである。従って、史料に現れる公共奉仕義務を遂行した人々が、この集団全体をどの程度代表しているのか明らかにするのは難しいと言わざるを得ない。たとえ今後爆発的に史料が増加したとしても、そもそも母数を計算するための基準が存在しないのであれば、この問題は完全に解決しえないだろう。これは、上に挙げたフィロイにも共通する問題である。これは、法制度的な担保や史料の担保ゆえに母数を推定できる可能性が高い近現代史とは、最も異なる点の一つであるように思われる。

史料の残存状況に関しては、ギリシア語史料が必然的に多数を占めることも問題とされている。ギリシア世界の範疇に含められる小アジア以東の状況を踏まえて研究する場合、史料的に極めて大きな偏りが生ずる可能性があるのである。例えば、こうした問題の一つとして、セレウコス朝に仕えた臣下のエスニシティに関するものがある。これは、ハビヒトが1958年に発表した論考に端を発する論争である。ハビヒトはこの中で、セレウコス朝に仕えた臣下の内、土着民は2.5%しかおらず、臣下のほとんどはギリシア人やマケドニア人によって占められていたとし、更に土着民は王朝の重要職に就くことはほとんどなかったと主張した(Habicht 1958)。この議論は後に多数の批判を浴びることとなったが、近年、新たにエンゲルスによる批判が出た(Engels 2017)。彼によれば、そもそも現代に残された史料の大半はギリシア人の手によって書かれたギリシア語史料であり、必然的にギリシア人やマケドニア人に叙述の焦点が当てられる頻度は上昇するという。従って現在残されている史料が

らこの問題に関する確実な解答を得ようとするのは、極めて困難である。また、こうした状況の中でも、断片的ながら宮廷内部における土着民のプレゼンスを確認することができるため、推定されるよりも多くの土着民が重要な役職を担ったと考えるべきだという。こうした議論からは、プロソボグラフィー的研究には、我々の許に現在残されている史料の性質を十分に把握する必要があるということを、再度確認させられる²⁰⁾。

3. 人名の問題

プロソボグラフィー的研究において重要となるのは人名である。しかし、古代ギリシア史においては、人名の同定すら問題になることがある。例えば、デイヴィスも指摘するように、同姓同名の人物が同じ人物であると断定する史料の根拠はない場合が多数存在する (Davies 2010: 140)。とりわけ、人物に関する情報がほとんど提示されない碑文史料ではそれが顕著である。国籍、所属区名まで明らかな事例であったとしても、それが同姓同名の親族である可能性は否定できない (同一人物である可能性を否定することもできないが)。碑文史料に表れる情報は極めて断片的であるため、このような問題を回避できないのである。碑文史料はプロソボグラフィー的研究の要となる史料だが、実はこうした重大な問題を抱えているのである。

人名といえば、人名に基づくエスニシティ同定についての問題もある。セレウコス朝において土着民が2.5%しかいなかった、という問題では、その方面から批判が加えられたことで知られる。すなわち、1993年にスーザン・M・シャーウィン＝ホワイトは、ハビヒトの議論を批判しつつ、土着民の中にはギリシア語の名前を採用した人物もいたはずであり、人名はエスニシティを判定する根拠にはならない、と主張したのである (Kuhrt and Sherwin-White 1993: 121-125, cf. 150-153)。確かに、もし確認されるセレウコス朝の臣下の中にギリシア語名を採用した人々が多数存在したとすれば、セレウコス朝の臣下のエスニシティがどのように構成されたか、判定することは不可能であろう。

以上のように、古代ギリシア史研究においては、プロソボグラフィー的研究の基本となる人名ですら、信頼を置くことができない場合が存在するのである。

4. 年代設定

分析対象となる集団を設定すると、今度は対象とする年代の設定が求められる場合がある。これは、プロソボグラフィー的研究手法一般に当てはまることではあるが、古代ギリシア史研究にはこの研究分野なりの問題が生ずる。その一つが、やはり史料である。

再びデイヴィスの研究に目を向けてみたい。この中で彼は、基本的な分析対象とする年代を前6世紀から前4世紀と設定する。これは古典期という文学的史料が豊富に利用可能な時代であるから、それ自体としては妥当な年代設定であるといえる。しかしアテナイはヘレニズム期やローマ期に至っても古代世界において有数の都市という地位を維持し続けていた

のであり、この時期を含めた研究が求められるのではないか。ややないものねだり的ではあったが、このような批判を受け、デイヴィスは *APF* の改訂版では、ヘレニズム期のデータを網羅することを標榜した。

しかし、古典期とヘレニズム期では、史料状況が全く異なっている。例えば、ヘレニズム期には *APF* 初版で重宝された三段櫓船奉仕義務遂行者のリストは存在しない。その代わりに、富裕者を判断する史料の一つとして、何らかの目的のため、緊急の寄付を公的に募るエピドシスに出資した人々のリストは存在する。しかし、当然のことながらエピドシスと三段櫓船奉仕義務では出資額、その目的、コンテキストは全く異なっている。それぞれの史料からそれぞれの社会の「富裕者集団」の輪郭を描くことは可能だが、このような史料的差異を考えるならば、析出される「富裕者集団」が同一の性質を有するのか、そこにどのような違いがあるのか、直ちに判断することはできないだろう。

他方で、年代設定があまりに恣意的であると、それ自体が批判の対象となるのみならず、十分な分析結果が期待できないおそれもある。例えば、パスヒデイスが行ったポリスとヘレニズム諸王との間に立つ「仲介者」を対象としたプロソポグラフィ的研究では、年代を前 322 年から前 190 年に設定している (Paschidis 2008)。確かに、ローマの東地中海進出はギリシア諸都市やヘレニズム諸王朝が築いてきた既存の政治システムを徐々に崩壊せしめるものであり、その分水嶺としてアンティオコス 3 世とアイトリア同盟がローマに敗れたアンティオコス戦争 (前 192- 前 188 年) の軍事衝突が終了した年 (前 190 年) を設定するのは、一つの議論の在り方として間違いではないだろう。しかし、エイジャーが指摘するように、年代を拡大し、ローマ進出後に生じた「仲介者」の変化を議論した方が、ヘレニズム世界のポリスと諸王朝の関係に関して、より有意義な結論を導くことができたように思われる (Ager 2011)。また、ローマの存在が年代的下限の基準とするのであれば、ローマが東地中海世界に一元的支配を確立した時期ではなく、ローマが東地中海世界に強く干渉し始める前 200 年頃を年代の下限とすべきようにも感じられる。

古代ギリシア史研究では史料が問題となりがちだが、他の時代と同じく、年代に関しても慎重に設定しなければならない。

5. 史料の問題

プロソポグラフィ的研究に関する古代史特有の問題として指摘できるのは、常にデータが更新されるということであろう。すなわち、古代史においては、発掘調査の結果、新たな碑文やパピルス史料が発見されるたびに、データの更新のみならず、既存のデータの書き換えが必要となるのである。新たな発掘調査の成果だけではない。碑文学の進展によって、既存の碑文史料の校訂が刷新され、新たなデータが作成されたり、既存のデータが削除されたりもするのである。このような発掘成果と既存の校訂の再検討・再解釈は膨大な数の成果を生み出しており、それ自体は大変喜ばしい成果である。しかし、プロソポグラフィ的研究

のためには、半永久的なクロスチェックが必要となる (Davies 2010: 134)。こうした成果が集約されることは減多になく、また集約されても、一人の研究者が特定の問題に関して全てのデータをカバーするのは至難の業である。それでも研究者は、例えば、碑文学であれば毎年の成果をまとめた *BE* (Bulletin épigraphique) や *SEG* (*Supplementum Epigraphicum Graecum*) を常にチェックし、成果を吸収しなければならない。

6. 「問い」の問題

最後に、プロソボグラフィーを歴史研究に用いる上で最も重要な問題を指摘しておきたい。歴史研究においてプロソボグラフィーを導入するのは、特定の問題を解決する上で何らかの集団の特質や人的紐帯を明らかにすることが必要になるためである。しかし、その解答手段とプロソボグラフィーの利用が、厳密に対応していない場合、その試みは失敗に終わる。これに関する有名な事例の一つは、おそらく、サイムの『ローマ革命』に対するアーノルド・モミリアーノによる批判である (Momigliano 1940)。サイムは、張り巡らされた人間関係の網の目によって形成された党派間の争いの中で、カエサル派をまとめあげたオクタウィアヌスが内乱に勝利し、旧来の貴族層に代わって、「第一人者」を支える体制が登場することで、ローマが平定されたとした。これが彼の論ずる「ローマ革命」だが、これに対してモミリアーノは、プロソボグラフィーに基づく政治や党派リーダーの変容だけでは、アウグストゥスの元首政への移行を十分に説明できない、と主張する。彼の論点は法や行政機構にも及ぶが、ここではプロソボグラフィーに特に関係する点のみを紹介したい。彼は、アウグストゥスの体制は、党派とそのリーダーの働き、そして「権力への彼らの意志の単なる結果 the [...] mere result of the will to power」(Momigliano 1940: 77) として生じたものだとし、サイムの議論をまとめる。しかし、プロソボグラフィーでは、個々人やグループの物質的・精神的欲求を説明することができないと彼は言う。この手法は、そうした欲求を議論の前提としているというのである。そうすると、「ローマ革命」発生の要因である「権力への意志」は、プロソボグラフィーという手法を用いた時点で決定していることとなる。また、共和政末期の史料状況では、指導的立場の人々のデータを集めることができても、大衆 (the masses) の情報を集めることができない。しかし、軍隊や政治に関与しない階級の役割はどうなるのか。モミリアーノの言うところでは、「革命」には少数の核となる集団が存在するものの、彼らの存在だけが「革命」全体を説明するものではないという。モミリアーノによるサイム批判の可否については筆者の手に余るので立ち入らないが、彼が提示した論点は、プロソボグラフィーという手法に対する批判としては正当なものであろう。

プロソボグラフィー的研究手法には多くの限界がある。単なる人的結合を政治的野心の結果や手段と読み替えたり、また、伝記的データの集積から統計処理を駆使することで人々の心性の変化を読み取ろうとしたりするには、相応の入念な理論形成や議論の前提が必要であり、もしそれが誤っていたならば、プロソボグラフィー的研究手法の利用は意味を持たなく

なる。歴史研究をする上で、問いと解答手段の対応関係は常に確認し続けなければならないが、これに関してもそれが当てはまるのである。プロソポグラフィーは、それ自体が目的化する傾向があるとして批判されることがあるが、歴史研究としてこの手法を利用する際には、この手法はあくまで何らかの問いに解答する数ある手段の一つであるということを、把握しなければならない。

おわりに

本稿の冒頭でも述べたが、プロソポグラフィー的研究手法は古代ギリシア史研究においても極めて重要な手法であり、歴史研究においても積極的に用いられてきた。この手法の有効性は論を俟たないが、多数の問題点が存在することは確かである。古代ギリシア史研究においては、史料の性質と数量の問題から、この手法を適用可能な範囲は、必然的に近現代史よりも限られたものとなる。近現代史で用いられているように、古代人の心性を考えるためには、この手法はあまり有効ではないかもしれない。それでも、古代の社会・経済・政治や社会の制度を考える上でこの手法が有効な手段であること、そして、データの蓄積によって産出された解釈に対する批判によって、研究史に新たな知見がもたらされてきたということは、これまで述べてきた通りである。

基本事項の再確認となるかもしれないが、以上を踏まえて、古代ギリシア史研究においてプロソポグラフィーを活用するには、①史料の性質や代表性と、史料の限界を十二分に把握すること、②プロソポグラフィー的研究手法を適用するのに適切な問題を設定すること、③分析対象とする集団を精緻に設定すること、が求められるといえるだろう。この中で、とりわけ、史料に関係する①と、法制度が近現代と比べて極めて曖昧な形態となる古代ギリシア社会の状況に深く関係する③に関しては、古代ギリシア史特有の問題が多く存在するようと思われる。

もし古代ギリシア史のプロソポグラフィー的研究手法の利用から、他の時代・地域でのそれに対して何らかのフィードバックが可能であるとすれば、筆者は③が最も重要な点になるのではないかと考える。分析対象とする集団を極めて精緻に概念化することができたならば、その集団の特質を対話可能な言語で説明することが可能となると思われるからである。それには、プロソポグラフィーに留まらない幅広い古代に関する理解が求められると同時に、社会学的な知見に精通することも求められるであろう。

最後に、今後の展望について、述べておきたい。古代史研究においては、常々史料の乏しさが問題になり、それがプロソポグラフィー的研究手法にも影響を与えていることは、本稿で繰り返し述べてきた。しかし、近年急速に促進されているデータベースのインターネット公開は、こうした問題の一部を解決する可能性を与えるものである。例えば、最近オクスフォード大学とバーミンガム大学が共同で、プロクセニアという称号に関するデータベース

を開設した²¹⁾。Proxeny Networks of the Ancient World (PNAW) と題されたこのホームページでは、古代に存在したプロクセノスのデータが網羅されている。こうしたデータベースを駆使することで、幅広い年代に渡ってプロクセニアの称号を得た人物の伝記的情報の集積と統計処理を施すことが容易になるだろう。こうしたデータベースを用いたデータの処理に、古代ギリシア史研究における今後のプロソボグラフィーの発展の一つのヒントがあるように思われる。

注

- 1) 高橋 1990. 当然、西洋史研究におけるプロソボグラフィー的手法の重要性は、改めて述べるまでもない。我が国の学界にも、重要な手法の一つとして人口に膾炙しているといえる。管見の限りでは、「プロソボグラフィー」の名を持つ邦語文献は古代史を除けば以下の通り。中谷 1988; 大野 1991; 大野 1992; 栗生沢 1994; 大野 2001; 安成 2001; 木下 2007; ジョージ 2009; 長井 2010; 佐藤 2012a-d; 濱本 2012; 平野 2012; 大野 2013; 平野 2014. 我が国の古代史研究において、プロソボグラフィーの研究手法を利用した代表的な事例として、さしあたり南川 1995; 南川 1998; 澤田 2010 を挙げる事ができる。無論、こうした成果は枚挙に遑がない。
- 2) Keats-Rohan 2007: 3-5, 18-20. 例えば、中世史でのプロソボグラフィー的研究についてはビーチ 2009.
- 3) Kirchner 1901-1903; Groag et Stein 1933.
- 4) ここまでの整理は、基本的に Heil 2011 に従った。なお、近代以前の「プロソボグラフィー」という言葉の用法に関しては、Barnes 2007 を参照のこと。
- 5) 高橋 1990: 128-137. また、近現代史の成果だが、青木 1997; 長井 2010; ルビアン 2017 など挙げることができる。
- 6) Poralla 1913; Poralla 1985. スパルタに関しては 1977 年にブラッドフォードがアレクサンドロスの時代まで対象を拡大した研究を出版した (Bradford 1977)。
- 7) Schober 1916, cf. Fossey 1991: 12.
- 8) Étienne et Knoepfler 1976. 他に、ゴンノイを扱ったヘリーの研究もある (Helly 1973)。
- 9) Tataki 1988; Tataki 1994; Tataki 1998; Zoumbaki 2005; Parissaki 2007; Paschidis 2008.
- 10) Pope 1935; Pope 1947. また、アテナイの外国人については後に Osborne and Byrne 1996 が出た。
- 11) Peremens et Van't Dack 1950; Peremens et Van't Dack 1952; Peremens, Van't Dack, de Meulenaire et Ijsewijn 1956; Peremens et Van't Dack 1959; Peremens et Van't Dack 1963; Peremens, Van't Dack, Mooren et Swinnen 1968; Peremens, Van't Dack, de Meulemeester-Swinnen et Hauben 1975; Peremens, Van't Dack, Mooren et Swinnen 1975; Peremens, Van't Dack et Clarysse 1981; La'da 2002. プトレマイオス朝については、他に Nicolaou 1974 が挙げられる。
- 12) <https://web.archive.org/web/20130512200157/http://prospitol.arts.kuleuven.ac.be/index.html> [2018/3/29 アクセス確認]
- 13) ヘレニズム期に関しては、この他に、アイトリア同盟に関連した人名を網羅した Grainger 2000 などがある。
- 14) <https://www.trismegistos.org/ref/index.php> [2018/4/13 アクセス確認]
- 15) Davies 2010: 134-135. 管見の限り、現在出版されているのは Fraser and Matthews 1987; Osborne and Byrne 1994; Fraser and Matthews 1997; Fraser and Matthews 2000; Fraser and Matthews with Catling 2005; Corsten 2010; Balzat, Catling, Chiricat and Marchand 2014. 小アジアについては 21 世紀初頭まで十分なプロソボグラフィーは存在しないと言われてきた (McLean 2002: 105-106)。しかし、小アジアを対象とした LGNP の出版により、この地域に関しても研究が蓄積されつつあると思われる。
- 16) ローマ史の事例だが Eck 2009: 155-157 を参照のこと。

- 17) Davies 1971: xviii. なおディヴィスの試みは既に先駆者がおり、Sundwall 1906 は前 360 年から前 322 年までに主要な公職を占めたアテナイ人を整理し、彼らが裕福か否か同定していった。
- 18) *APF* に関しては、対象年代を前 229 年以降まで拡大させた改訂第 2 版が 1984 年ごろから徐々に進展している (Davies 2010: 133)。 *LGNP* や、 *PAA* と表される、アテナイに関する包括的なプロソボグラフィー *Persons of Ancient Athens* (Trail 1994-2016) の成果を踏まえつつ、現在も進行中であるようだ (Oliver and Davies 1996)。
- 19) 古代末期のプロソボグラフィー (*PLRE*) における基準の問題については Mathisen 2003 を参照のこと。ここでは、4. で述べる年代設定の問題についても議論されている。
- 20) この問題については、大戸 1999; Eck 2009: 155-157 も参照のこと。
- 21) <http://proxenies.csad.ox.ac.uk/places/home> [2018/4/3 アクセス確認]。

参考文献一覧

- Αρβανιτόπουλος, Α. Σ. (1925/6) 'Προσωπογραφία Τριπολιτών Περραιβών' *AE* 64-65: 198-219.
- (1928) *Γραπταί Στήλαι: Δημητριάδος-Παγασών*. Αθήνα.
- Ager, S. L. (2011) 'Review: Paschidis (2008)' *JHS* 131: 222-223.
- Badian, E. (1961) 'Harpalus' *JHS* 81: 16-43.
- Balzat, J. -S., R. W. V. Catling, É. Chiricat and F. Marchand (2014) *Lexicon of Greek Personal Names VB: Corstal Asia Minor: Caria to Cilicia*. Oxford.
- Barnes, T. D. (2007) 'Prosopography Modern and Ancient' in Keats-Rohan (ed.) 71-82.
- Berve, H. (1926) *Das Alexanderreich auf prosopographischer Grundlage*. 2 Bände. München.
- Billows, R. A. (1990) *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hellenistic State*. Berkeley/Los Angeles/London.
- Bradford, A. S. (1977) *A Prosopography of Lacedaemonians from the Death of Alexander the Great, 323 B.C., to the Sack of Sparta by Alaric, A.D. 396*. Munich.
- Cameron, A. (ed.) (2003) *Fifty Years of Prosopography: The Later Roman Empire, Byzantium and Beyond*. Oxford.
- Coussement, N. (2016) *'Because I Am Greek': Polyonymy as an Expression of Ethnicity in Ptolemaic Egypt*. Leuven/Paris.
- Corsten, T. (2010) *Lexicon of Greek Personal Names VA: Coastal Asia Minor: Pontos to Ionia*. Oxford.
- Davies, J. K. (1971) *Athenian Propertied Families 600-300 B.C.* Oxford.
- (1981) *Wealth and the Power of Wealth in Classical Athens*. New York.
- (2010) 'Revising Athenian Propertied Families: Progress and Problems' in R. W. V. Catling and F. Marchand with the Assistance of M. Sasanow (eds.) *Onomatologos: Studies in Greek Personal Names Presented to Elaine Matthews*. Oxford: 132-142.
- Dunant, F. (1973) *Le culte d'Isis dans le bassin oriental de la Méditerranée*. Leiden.
- Dunant, C. et J. Pouilloux (1958) *Recherches sur l'histoire et les cultes de Thasos, II*. Paris.
- Eck, W. (2009) 'Prosopography' in A. Barchiesi and W. Scheidel (eds.) *The Oxford Handbook of Roman Studies*. Oxford: 147-159.
- Engels, D. (2017) 'The Seleucid and Achaemenid Court: Continuity or Change?' in A. Erskine, L. Llewellyn-Jones and S. Wallace (eds.) *The Hellenistic Court: Monarchic Power and Elite Society from Alexander to Cleopatra*. London: 66-100.
- Étienne, R. et D. Knoepfler (1976) *Hyettos de Béotie et la chronologie des archontes fédéraux entre 250 et 171 avant J.-C.* Paris.
- Fossey, J. M. (1991) *The Study of Ancient Greek Prosopography*. Chicago.
- Fraser, P. M. and E. Matthews (1987) *Lexicon of Greek Personal Names I: Aegean Islands, Cyprus, Cyrenaica*. Oxford.
- and ——— (1997) *Lexicon of Greek Personal Names IIIA: Peloponnese, Western Greece, Sicily, and*

- Magna Graecia*. Oxford.
- and ——— (2000) *Lexicon of Greek Personal Names IIIB: Central Greece: From the Megarid to Thessaly*. Oxford.
- and ——— with R. W. V. Catling (2005) *Lexicon of Greek Personal Names IV: Macedonia, Thrace, Northern Regions of the Black Sea*. Oxford.
- Göbller, J. (1537) *Prosopographiarum libri quatuor in quibus personarum illustrium descriptiones aliquot seu imagines ex optimis quibusdam authoribus per Justinum Goblerum selectae continentur*. Moguntiae (= Mainz).
- Grainger, J. A. (1997) *Seleucid Prosopography and Gazetteer*. Leiden.
- (2000) *Aitolian Prosopographical Studies*. Leiden.
- Groag, E. et A. Stein (ed.) (1933) *Prosopographia imperii Romani Saec. I. II. III*. Pars 1. ed. altera. Berolini.
- Groen van Prinsterer, G. (1823) *Prosopographia platonica: Sive expositio iudicii, quod Plato tulit de iis, qui in scriptis ipsius aut loquentes inducuntur, aut quavis de causa commemorantur*. Lugduni Batavorum (= Leiden).
- Gude, M. (1933) *A History of Olynthus: With a Prosopographia and Testimonia*. Baltimore.
- Habicht, C. (1958) 'Die herrschende Gesellschaft in den hellenistischen Monarchien' *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 45: 1-16.
- Hatzfeld, J. (1912) 'Les Italiens résidant à Délos mentionnés dans les inscriptions de l'île' *BCH* 36: 5-218.
- (1919) *Les trafiquants Italiens dans l'Orient hellénique*. Paris.
- Heil, M. (2014) 'Prosopography' in Oxford Bibliographies (<http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780195389661/obo-9780195389661-0077.xml> [2018/9/30 閲覧]).
- Heckel, W. (2006) *Who's Who in the Age of Alexander the Great: Prosopography of Alexander's Empire*. Oxford.
- Helly, B. (1973) *Gonnoi. II*. Amsterdam.
- Herbillon, J. (1929) *Les cultes de Patras: Avec une prosopographie Patréenne*. Baltimore/London/Oxford.
- Keats-Rohan, K. S. B. (2007) 'Introduction: Chameleon or Chimera? Understanding Prosopography' in id. (ed.) 1-32.
- (ed.) (2007) *Prosopography Approaches and Applications: A Handbook*. Oxford.
- Κανατσούλη, Δ. (1955) *Μακεδονική Προσωπογραφία (Από του 148 π.Χ. μέχρι των Χρόνων του Μ. Κωνσταντίνου)*. Θεσσαλονίκη.
- Kirchner, J. (1901-1903) *Prosopographia Attica. Band I-II*. Berolini.
- Kuhrt, A. and S. Sherwin-White (1993) *From Samarkhand to Sardis: A New Approach to the Seleucid Empire*. Berkeley/Los Angeles.
- Lacroix, M. (1914) 'Les architectes et entrepreneurs à Délos de 314 à 240' *RPh* 38: 303-330.
- La'da, C. A. (2002) *Prosopographia Ptolemaica, X: Foreign Ethnic in Hellenistic Egypt*. Louvain.
- Le Bohec, S. (1985) 'Les philoi des rois Antigonides' *REG* 98: 93-124.
- Lerat, L. (1952) *Les Locriens de l'Ouest. II. Histoire, Institutions, Prosopographie*. Paris.
- Mathisen, R. W. (2003) 'The Prosopography of the Later Roman Empire' in Cameron (ed.): 23-40.
- McLean, B. H. (2002) *An Introduction to Greek Epigraphy of the Hellenistic and Roman Periods: From Alexander the Great to the Reign of Constantine (323 BC-AD 337)*. Ann Arbor.
- Merle, H. (1916) *Die Geschichte der Städte Byzantion und Kalchedon: Von ihrer Gründung bis zum Eingreifen der Römer in die Verhältnisse des Ostens*. Kiel.
- Μιτσού, Μ. Θ. (1952) *Αργολική Προσωπογραφία*. Αθήνα.
- Momigliano, A. (1940) 'Review: R. Syme (1939) *The Roman Revolution*. Oxford' *JRS* 30: 75-80.
- Mooren, L. (1975) *The Aulic Titulature in Ptolemaic Egypt: Introduction and Prosopography*. Brussel.
- (1977) *La hiérarchie de cour ptolémaïque: contribution à l'étude des institutions et des classes dirigeantes à l'époque hellénistique*. Leuven.

- Nicolaou, I. M., (1974) *Prosopography of Ptolemaic Cyprus*. Göteborg.
- Oliver, G. J. and J. K. Davies (1996) 'A New Edition of Athenian Propertied Families' *ZPE* 110: 306-308.
- Olshausen, E. (1974) *Prosopographie der hellenistischen Königsgesandten. Teil 1. Von Triparadeisos bis Pdyda*. Leuven.
- Osborne, M. J. and S. G. Byrne (1994) *Lexicon of Greek Personal Names II: Attica*. Oxford.
- and ——— (1996) *The Foreign Residents of Athens*. Leuven.
- Papastavrou, J. (mit Beiträgen von C.F. Lehmann-Haupt und A. Stein) (1936) *Amphipolis: Geschichte und Prosopographie*. Leipzig.
- Parissaki, M. -G. (2007) *Prosopography and Onomasticon of Aegean Thrace*. Athens.
- Paschidis, P. (2008) *Between City and King: Prosopographical Studies on the Intermediaries Between the Cities of the Greek Mainland and the Aegean and the Royal Courts in the Hellenistic Period (322-190 BC)*. Athens.
- Peremans W. et E. Van't Dack (1950) *Prosopographia Ptolemaica, I: L'administration civile et financière*. Louvain.
- et ——— (1952) *Prosopographia Ptolemaica, II: L'armée de terre et la police*, Louvain.
- et ——— (1959) *Prosopographia Ptolemaica, IV: L'agriculture et l'élevage*. Louvain.
- et ——— (1963) *Prosopographia Ptolemaica, V: Le commerce et l'industrie. Le transport sur terre et la flotte. La domesticité*. Louvain.
- , ——— et W. Clarysse (1981) *Prosopographia Ptolemaica, IX: Addenda et corrigenda au volume III*. Louvain.
- , ———, L. de Meulemeester-Swinnen et H. Hauben (1975) *Prosopographia Ptolemaica, VII: Index nominum*. Louvain.
- , ———, H. de Meulenaire et J. Ijsewijn (1956) *Prosopographia Ptolemaica, III: Le clergé, le notariat, les tribunaux*. Louvain.
- , ———, L. Mooren et W. Swinnen (1968) *Prosopographia Ptolemaica, VI: La cour, les relations internationales et les possessions extérieures. La vie culturelle*. Louvain.
- , ———, ———, et ——— (1975) *Prosopographia Ptolemaica, VIII: Addenda et corrigenda aux volumes I et II*. Louvain.
- Pope, H. (1935) *Non-Athenians in Attic Inscriptions: Prolegomena and a Prosopography Arranged in Alphabetical Order*. New York.
- (1947) *Foreigners in Attic Inscriptions: A Prosopography Arranged under Ethnic in Alphabetical Order*. Philadelphia.
- Poralla, P. (1913) *Prosopographie der Lakedämonier bis auf die Zeit Alexanders des Grossen*. Breslau.
- (1985) *Prosopographie der Lakedaimonier*. 2nd edition. (ed. by A. S. Bradford). Chicago.
- Pouilloux, J. (1954) *La forteresse de Rhamnonte*. Paris.
- Reilly, L. C. (1978) *Slaves in ancient Greece: Slaves from Greek Manumission Inscriptions*. Chicago.
- Rigsby, K. J. (1995) 'Review: Osborne and Byrne (1994); Traill (1994); H. Solin and O. Salomies (1994) *Repertorium nominum gentilium et cognominum Latinorum. Editio nova*. Hildesheim/Zurich/New York' *BMCR* 95.05.02 [2018/9/30 閲覧確認].
- Robinson, D. M. (1906) *Ancient Sinope: An Historical Account with a Prosopographia Sinopensis and an Appendix of Inscriptions*. Baltimore.
- Roussel, P. (1908) 'Les Athéniens mentionnés dans les inscriptions de Délos' *Bulletin de correspondance hellénique* *BCH* 32 : 303-444.
- (1915/6) *Les cultes égyptiens à Délos, du IIIe au Ier siècle av. J.-C.* Paris/Nancy.
- Salomies, O. (2001) 'Names and Identities: Onomastics and Prosopography' in J. Bodel (ed.) *Epigraphic Evidence: Ancient History from Inscriptions*. London/New York: 73-94.
- Sarikakis, T. C. (1976[1951]) *The Hoplite General in Athens; A Prosopography*. Chicago.
- Savalli-Lestrade, I. (1998) *Les Philoi royaux dans l'Asie hellénistique*. Genève.

- Skalet, C. H. (1928) *Ancient Sicyon: with a prosopographia Sicyonia*. Baltimore.
- Schober, F. (1924) 'Phokis' (Diss. Jena).
- Στεφανής, Ι. Ε. (1988) *Διονυσιακοί Τεχνίται. Συμβολές στην Προσωπογραφία του Διονυσιακού Θεάτρου και της Μουσικής των Αρχαίων Ελλήνων*. Ηράκλειον.
- Sundwall, J. (1906) *Epigraphische Beiträge zur sozial-politische Geschichte Athens*. Leipzig.
- (1910) *Nachträge zur Prosopographia Attica*. Helsingfors.
- Tataki, A. B. (1988) *Ancient Beroea: Prosopography and Society*. Athens.
- (1994) *Macedonian Edessa: Prosopography and Onomasticon*. Athens.
- (1998) *Macedonians Abroad: A Contribution to the Prosopography of Ancient Macedonia*. Athens.
- Taylor, C. (2007) 'The Sociology of Athenian Democracy: A Prosopographical Approach' in Keats-Rohan (ed.) 313-324.
- Traill, J. S. (1994-2016) *Persons of Ancient Athens*. Vol. 1-22. Tronto.
- Verboven, K., M. Carlier and J. Dumolyn (2007) 'A Short Manual to the Art of Prosopography' in Keats-Rohan (ed.) 35-69.
- Zoumbaki, S. (2005) *Prosopographie der Eleer bis zum 1. Jh. v. Chr.* Athen.
- 青木康 (1997) 『議員が選挙区を選ぶ——18 世紀イギリスの議会政治——』 山川出版社。
- 安成英樹 (2000) 「フランス絶対王政における訴願審査官のプロソポグラフィ」『お茶の水史学』 44、79-105 頁。
- 大戸千之 (1968) 「セレウコス朝の支配とオリエント人——アンティオコス 3 世時代の場合——」『西洋史学』 79、43-67 頁。
- (1993) 『ヘレニズムとオリエント——歴史の中の文化変容——』 ミネルヴァ書房。
- (1999) 「セレウコス朝史の研究とプロソポグラフィ」『立命館文学』 558、520-533 頁。
- 大野誠 (1991) 「18 世紀イギリス科学のプロソポグラフィーに関する 2 著——Biobibliography of British Mathematics and its Applications, Part2 1701-1760/R.V.Wallis, P.J.Wallis (1986), Eighteenth Century Medics/P.J.Wallis, R.V.Wallis (1988) ——」『科学史研究』 18、43-45 頁。
- 大野誠 (1992) 「Society of Arts 設立期 (1754-57) の活動的会員のプロソポグラフィ」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇』 32-2、33-70 頁。
- 大野誠 (2001) 「プロソポグラフィ考」『化学史研究』 28-2、130 頁。
- 大野誠 (2013) 「プロソポグラフィ考」『化学史研究』 40-1、34-41 頁。
- 前野弘志 (1998) 「アテナイ植民地のアイデンティティー——プロソポグラフィックなアプローチの試み——」『史学研究』 222、46-69 頁。
- 木下賢一 (2007) 「フランス第二帝政と名望家支配——政治エリートのプロソポグラフィを通して——」『駿台史学』 130、23-51 頁。
- 佐藤団 (2012a) 「マクデブルク法研究再考 (1) ——プロソポグラフィ的検討による参審人団研究試論——」『法学論争』 171-1、24-49 頁。
- 佐藤団 (2012b) 「マクデブルク法研究再考 (2) ——プロソポグラフィ的検討による参審人団研究試論——」『法学論争』 171-2、33-60 頁。
- 佐藤団 (2012c) 「マクデブルク法研究再考 (3) ——プロソポグラフィ的検討による参審人団研究試論——」『法学論争』 171-3、27-52 頁。
- 佐藤団 (2012d) 「マクデブルク法研究再考 (4・完) ——プロソポグラフィ的検討による参審人団研究試論——」『法学論争』 171-4、26-43 頁。
- 澤田典子 (2010) 『アテネ民主政——命をかけた八人の政治家——』 講談社。
- ジョージ・B (2009) 「プロソポグラフィ」『宮崎大学教育文化学部紀要 社会科学』 20、73-104 頁。
- 高橋秀 (1990) 「古代ローマ史プロソポグラフィ研究」『史苑』 50、127-148 頁。
- 竹内一博 (2007) 「前 4 世紀アテナイの政治文化とデーモス」(神戸大学博士学位請求論文)
- 長井伸仁 (2010) 「プロソポグラフィとミクロの社会史——フランス近現代史研究の動向から——」『思想』 1032、143-159 頁。
- 中谷功治 (1988) 「プロソポグラフィー研究と 8・9 世紀ビザンツ——F.Winermann の研究を中心に

——」『西洋史学』150、139-143 頁。

栗生沢猛夫 (1994) 『モスクワ国家の貴族層——プロソボグラフィーの手法によるその形成史に関する研究——』 文部省科学研究費補助金研究成果報告書。

濱本真美 (2012) 「A. V. Beliakov, *Chingisidy v Rossii XV-XVII vekov: prosopograficheskoe issledovanie* (『15-17 世紀ロシアのチングス商——プロソボグラフィー的研究——』)」『東洋史研究』71、422-417 頁。

ビーチ・G (2009) 「プロソボグラフィ」(中堀博司訳)『宮崎大学教育文化学部紀要 社会科学』20、73-104 頁。

平野智洋 (2012) 「歴史家ゲオルギオス・スフランツィスに関するプロソボグラフィー——スフランツィス家の系譜と社会的地位——」『オリエント』54-2、74-91 頁。

平野智洋 (2014) 「後期ビザンツ有力者 (15 世紀) の系譜学とプロソボグラフィーに関する一考察——皇帝文書確認官アレクシオス・パレオロゴス・ジャンンプラコンー族の事例——」『オリエント』57-2、29-40 頁。

南川高志 (1995) 『ローマ皇帝とその時代——元首政期ローマ帝国政治史の研究——』創文社。

—— (1998) 『ローマ五賢帝——「輝ける世紀」の虚像と実像——』講談社。

ルビアン・J (2018) 「19 世紀フランスにおける準幹部公務員——ある研究の中間報告——」小田中直樹 (編訳)『歴史学の最前線——<批判的転回>後のアナール学派とフランス歴史学——』法政大学学術出版会。